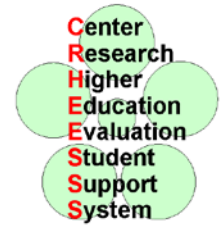


週刊センターニュース No.270



第270号(2009年8月3日) 毎週月曜日発行
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター
URL: http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm

〇〇〇 他大学におけるFD活動の事例紹介 〇〇〇

7月18日、京都FD開発推進センター主催の第1回FDセミナーに参加し、龍谷大学理工学部および京都工芸繊維大学のFD活動について報告があったので、ここで紹介したい。

龍谷大学理工学部については、同学部教授の林久夫氏より物質工学科の取組みを中心に紹介された。近年の中教審答申も引用しながら、学士課程教育、大学院教育の現状における問題点を、1) 学位授与の方針が教育課程の編成や学習評価のあり方を律するものになっていない、2) 成績評価が教員の裁量に依存しており、組織的な取組みが弱い、3) 学習の量を確保し単位制度の実質化を行う必要がある、と整理された上で、具体的な改善の取組みが紹介された。

理工学部のディプロマポリシー(DP)に基づく学科ごとの学習教育目標(カリキュラムポリシー、CP)が設定されている。物質化学科のCPは、A) 共生循環、B) グリーンケミストリー、C) 技術者倫理、D) 化学の基礎、E) 化学の応用、F) 国際的コミュニケーション能力、と設定され、さらに例えばB) グリーンケミストリーについては(B) 共生や循環の発想に基づき、環境にやさしい工業製品の製造開発を始めとするグリーンケミストリーの考え方や手法を身につける、(B1) 科学技術が地球環境や社会に及ぼす影響についての基礎知識を身につける、(B2) 環境に配慮しながら化学の知識をものづくりに応用できる知識能力を身につける、と明文化されている。物質化学科のすべての専門科目と共通科目の一部はCPの各項目に対応付けられている。例えば、(B1)には環境科学(必須)、資源エネルギー論(必須)、環境化学(選必)が属し、(B2)には物質化学概論(必須)、グリーンプロセス工学(選必)、化学リスク学(選必)、エネルギー資源工学(選必)が属している。つまり、カリキュラムはCPの各項目と各授業科目との対応関係を示すカリキュラムマップとして学生に示される。またシラバスにも各授業科目が属するCPが学習教育目標として明記されている。したがって、シラバスの学習教育目標の記述はCPの項目に限定され学科内では統一化されている。

理工学部では学科ごとに教育向上改善検討委員会が置かれ、教育方法、教育内容とレベルの調整が、シラバスを教員相互にチェックすることにより行われている。また授業自己点検報告書が作成され、教員と学生に開示される。特に各教員の裁量に依存しがちな成績評価については、上記委員会において試験問題及び採点済み答案の点検が行われている。

単位の実質化のために、平成19年度より授業時間外演習が導入されている。数学や物理化学などの開講時限に続く空き時限に当該科目の演習を行う。この授業時間外演習はTAが担当し、受講を学生に強制するものではない。

大学院教育についても明確なCPの設定、体系的なカリキュラムの構築、客観的で厳格な成績評価の検討や取り組みが行われている。特に、専攻において共通に必要な基礎能力は授業で養成することができるようカリキュラムの整備が行われた。例えば、電子顕微鏡の操作やX線回折測定など、ど

の研究室でも必要なスキルは授業科目により学ぶ。従来の研究室内の教育からコースワークによる教育の転換である。

次に、京都工芸繊維大学のFDの取り組みについて紹介したい。セミナーでは同大学工芸科学部副学部長の森迫清貴教授により授業評価アンケートの取り組みについて詳細に報告された。学生による授業評価アンケートにおいては、シラバスに記載されている学習目標の各項目がそのまま評価項目となる。また、学生による授業評価アンケートとともに教員による担当授業科目についての自己評価アンケートが平成19年度より実施されているとのことであった。

龍谷大学理工学部の事例で紹介したDP、CPの明文化や、それらに基づく学習達成度評価は、本学工学部も含め工学系学部で検討が進んでいる。本学においても今後全学的な取り組みが必要になると思われる。
(文責：大学教育研究開発部門 西山宣昭)

○●○ 初年次教育の現在－文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室

「大学における教育内容等の改革状況について」平成21年3月31日から－ ○●○

副題とした文部科学省標記文書については、共同学習会や学内FDで言及してきた。文部科学省HPに掲載されたのは、大学・短大への悉皆調査結果による平成19年度の改革状況である。全一年生必修の初学者ゼミが終了するこの時期、標記文書で初年次教育に関する全国の状況を確認することは意味があると考えられる。

簡単に紹介すると、初年次教育を「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることが強く意識されたもの」と定義した上で、それを実施している大学が570大学・約79%（平成19年度現在）であり、「文章作法や口語発表の技法、学問や大学教育全般に対する動機付けのためのプログラムを開設する大学が多い」とまとめられている。

具体的内容として示された15のプログラムの詳細は、文部科学省HPで確認していただきたいが、本学では、他大学からの注目を集めてきた「大学・社会生活論」、そして「初学者ゼミ」でその全てを網羅していると判断できる。これを踏まえて、本学では今後、この学習成果を学生たち自身が他の授業で実際に形にできる場を提供することが課題となると考えられる。ちなみに、当センターが企画・担当を行っている共通教育科目「学生と大学システム」や人間社会学域共通科目「大学・学問論」では、初年次教育の効果検証も意識しながらの授業実践を行っている。そこでの学生によるアンケート結果もアカンサスFDで学内に公開していく予定である。

全学出動体制のもと、共通教育を担当された各授業担当者には、1年次前期科目について、所期の教育目標が達成できたかどうかを振り返っていただき、上記のデータ等を来年度の学士課程教育全体のカリキュラム・各科目シラバス作成の参考としていただければ幸いである。

(文責：教育支援システム研究部門 青野 透)

○●○ FD・SD 企画の情報提供のお願い ○●○

当センターでは、学内はもちろん学外で開催されますFD・SDに関するシンポジウム・セミナー等についても情報収集を行っておりますので、関連する情報提供をお願いします。学内ポータル「アカンサスFD」における「FD カレンダー」「SD カレンダー」に掲載させていただきます。何卒宜しくごお願い申し上げます。